

## バラのアーチの下で

絵美は中学校二年生、バスケットボール部に入っている。

二年生の部員は絵美と香織、沙希らの五人。新人大会で都大会に出場することを誓い合い、日々の厳しい練習に励んでいた。

絵美は元々の運動神経のよさもあって一年生の頃からめきめきと上達し、試合での活躍もめざましかった。一方、香織は、一生懸命に練習してはいるものの、なかなか上達しない。試合でもよくミスを繰り返した。

「香織、もっと集中してボールを見て！ もう疲れたの？ 足が止まってる！」  
と、いつもげきを飛ばす絵美だった。

絵美と香織とは、同じ小学校の出身で家も近く、仲がよかった。二人の家の近くには、大きなバラのアーチのある公園があった。春と秋にはさまざまな色の花が咲き誇り、公園は華やかなバラの香りに深く包まれる。絵美と香織の二人は、この公園が大好きだった。登校の時はそのバラのアーチの下で待ち合わせ、下校の時は同じその場所で見送るのが常であった。

今日も部活動の練習が終わり、二人はバラのアーチのそばまで来た。  
「ミスぐらい誰にでもあるから。また明日もがんばろう。」

と、いつものように香織を励ます絵美だった。

絵美は香織に、バスケットボールがうまくなってほしいと心から願っていた。

新人大会が始まった。絶好調な絵美のプレーに引張られ、チームは順調に勝ち進んできた。五人の夢は、もう少しで手の届くところまで来た。この試合に勝てば、都大会出場が決まる。



相手は練習試合で一度も勝ったことのない強豪であったが、試合が始まってみると、絵美の活躍もあって全く互角の展開が続いていた。そんな中、香織はというと、相変わらずミスが目だし、表情は硬かった。

絵美たちのチームがわずかにリードして迎えた試合終了直前、沙希のパスがゴール下にいた香織に回った。いいパスだった。しかし、香織は緊張のためか、このなんでもないパスをキャッチできなかった。ボールを奪われ、そのまま速攻から相手チームのペースで反撃された。ワンゴール差で負けた。

絵美のチームの選手は、皆、泣いた。ベンチの後輩たちも泣いていた。ところが香織に涙はなかった。みんなへの申し訳ない気持ちでいっぱい、涙も出てこなかったのである。

更衣室に集まった後も、部員たちの悔し涙は止まらなかった。香織は、みんなに合わせる顔がなくてコート脇に残ったままだった。

沙希がいつにも増して興奮し、声を荒げていた。

「香織のあの態度は何。みんなが悔しくて泣いているのに涙も見せない。だからうまくならないのよ。香織がいなければ絶対勝てたわ。」

他の部員たちも沙希の言うことに同調した。

「練習してもうまくならないんだから、さっさと他の部に移ればいいのに。」

「みんなに迷惑がかかっていて分かってないのかな。」

いつもは香織をかばう絵美であったが、この時ばかりは言葉もなくうなだれていた。

このことがあってから、絵美の足は、あの公園に向かわなくなった。そして、練習試合では香織にパスが回らなくなった。

「絵美、パス！」

と香織が叫んでも、絵美は、あえて沙希にパスを回した。香織と目を合わすことさえしなくな



った。

（絵美まで……。）

香織は体から力がぬけていくのを感じた。絵美が離れていってしまうことは、とてもつらいことだった。それでも、

（自分がへただから悪いんだ。）

と、香織は歯を食いしばって練習を続けた。

香織に回るパスが少なくなったせいも、前にも増して絵美にパスが多く集まるようになった。練習試合では、絵美の大活躍で圧勝することが多くなった。

ところが、ある日の練習試合から皆の様子がおかしい。沙希たちから絵美にパスが回ってこなくなつたのだ。絵美には、何でこうなってしまったのか全く分からなかった。

（私の何がいけないの？ 誰か教えて！）

と、誰にも相談できずに苦しむ日が何日も続いた。

そんなある日、絵美が練習を終えて更衣室に向かうと、沙希たちの話し声が聞こえてきた。香織はもう帰った後のようだ。

（私のことを話しているみたい。）

と、絵美は緊張して、耳をそばだてた。

「絵美ったら、少しバスケがうまいからって調子に乗っているわよね。個人プレーが多過ぎよ。」

「試合に勝ったのは私のおかげと言わんばかりの態度なんだから。」

「少しは反省したかなあ。香織はへただけで謙虚さがあるよね。」

それを聞いた絵美の目に、涙があふれてきた。

（ひどい……。なんでそんなことを……。そんなことは全く思っていないのに。）

絵美は、静かにその場から離れ、沙希たちが帰った後、更衣室で着替えを始めた。

（もう、こんなチームにはいたくない。でも、来年の春の大会で都大会に出場する夢は捨てた





くない。いったいどうすれば……。)  
椅子に座り込んだまま、絵美は動けなかった。

◆  
どれくらいの間、考え込んでいただろうか。絵美の足は自然とあの公園に向かっていった。  
(香織に会えるかもしれない。)

アーチの下に、香織の姿が見えた。香織は毎日欠かさずここで絵美を待っていたのである。  
香織は絵美の顔を見ると、小さな声で話し始めた。

「絵美、本当にごめん。私があまくならないからみんなに迷惑をかけて。私、何回もバスケット部を辞めようと思った。でも、絵美が言ってくれたから……。励ましてくれたから……。だから、私、これまで続けてこられた。絵美、ごめんね。絵美も、もう我慢できないよね。こんな私なんか……。」

香織の目にも、絵美の目にも、涙があふれていた。

数日後、二人はバラのアーチの下で待ち合わせ、練習試合の会場に向かった。

絵美が冗談を言うと、香織が大きな声で笑った。

来春、都大会が始まる頃には、公園のバラたちが競うように咲き誇り、絵美たちを応援することだろう。

(鴨井 雅芳 作)

